

植	物	
防	疫	
講	座	

## 虫害編-13

## イチモンジセセリの発生生態と防除

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 いし ざき ま み  
中央農業研究センター 石 崎 摩 美

## はじめに

イチモンジセセリ *Parnara guttata guttata* Bremer et Grey (チョウ目：セセリチョウ科) (図-1a) は、私達の身近な環境に生息するチョウであり、住宅地の庭先などでも成虫が吸蜜する姿をしばしば見かける。黄褐色～濃茶色の地味な色合いで、黒く丸い大きな複眼を有する。また、秋に集団で渡りをするチョウとして知られている。一方、本種の幼虫はイネの葉を食害する害虫であり、葉を寄せ集め「ツト」と呼ばれる巣のような物を作ることから「イネツトムシ」と呼ばれている。1887～1953年の害虫多発生年表(宮下, 1961)によれば、ほぼ毎年のようにいずれかの地域で大発生が記録されており、害虫としても古くから関心の高かった昆虫であるといえる。

本稿では、水稻害虫としてのイチモンジセセリについて、生態や調査法、被害対策を中心に紹介する。

## I 形態と生態

## 1 形態

成虫は体長約 20 mm、開翅長約 35 mm の小型のチョウである(図-1a)。前翅および後翅に白い斑紋があり、後翅の四つの斑紋は直線上に並んでいる。雌雄の違いは腹部後端で判別できるが(長谷川, 1975)、翅の模様には雌雄差がなく、捕獲せずに野外で雌雄を判断するのは難しい。

卵は直径約 1 mm の饅頭型で、葉の表面に 1 卵ずつ産み付けられる(図-1b)。産卵直後はベージュ色で、ふ化が近づくと灰黒色になる。

ふ化幼虫は体長 2～3 mm で黒い頭部が目立つ(図-2a)。幼虫の体色は黄白色～緑色である。若齢幼虫は葉の先端や縁を細く折り畳むか筒状に丸めた小さなツトを作る(図-2b)。中齢以降は、1 枚～複数枚の葉を綴り合



図-1 a: イチモンジセセリ成虫, b: 卵, c: 蛹

わせた筒状のツトを作る(図-2d)。5 齢(終齢)幼虫は体長 40 mm 程度に達する(図-2c)。中齢以降の幼虫頭部には特徴的な模様があり、チャバネセセリなど類似種との識別は容易である。また、4～5 齢幼虫になると雄では第 6 腹節の背面を透かして赤褐色の精巣が見えるので、雌雄の判別が可能である(図-3)。

幼虫は夜行性で、昼間はツトの中に潜んでいる。夜になるとツトから体を出しイネの葉を摂食する。ツトの外に尾部を出して排泄物を飛ばす習性があり、ツトを開けても排泄物は溜まっていない。5 齢後半になると、腹部の気門上に白斑が現れてくる。このころから前蛹になるまでの数日間、摂食量が急増する。蛹化時は、両端が閉じられた紡錘型のツトを作り、その中で白い綿状分泌物に包まれた白褐色～黒褐色の蛹になる(図-1c)。

## 2 生活史

本種は関東～西日本においては基本的に年 3 回の発生

Ecology and Management of Skipper Butterfly, *Parnara guttata guttata* in Rice Fields. By Mami ISHIZAKI

(キーワード: イネツトムシ, 水稻害虫, 発生生態, 発生予察, 管理法)